



今から一〇〇年以上前の明治二三年(一八九〇)、四万十川沿いでの出来事です。大暴風雨によって四万十川が大洪水になる恐れが出てきたため、屋敷の低い家屋は高台に家財道具や牛馬を避難させて、万一の大洪水に備えました。我が家では二階に上げていた米俵を、屋根を抜いて上の畑に引き上げました。

米俵をあげてホツとするとき、つないでいた子馬が道からすべって、川に転落してしまいました。これを見た女たちは声を揃えて、「おろよ、おろよ」(おろとは馬のこと)と必死の声を振り絞って呼びましたが、子馬は泳いで家に帰ろうとして、そのうち流れに流され出しました。

水泳達者な祖父も泳いで助けに行くことができず、人々は「おろよ、おろよ」と呼ぶほかはありませんでした。幸いにも子馬は親馬のいななきによって、頭の向きを変えて泳いで帰ってきました。

動物とは言え、あの大洪水に親馬のいななきによって、流されずに親の元に帰ってきた親子の絆は、この時の人々の感情に刻み込まれました。子馬が上がってくると、親馬は長い舌でなめまわし、子馬は救われたと喜んでいきます。大暴風雨、大洪水の中での感動的な出来事でした。



## 背景

明治23年(1890)は初夏から天気が順調で、作物は近年にない豊作でした。ところが、9月9日午後から降り始めた雨は10日にはやや激しくなり、さらに11日には豪雨となり、四万十川と後川の水量は増加しました。このため、中村のまちは、低地はもちろん、上町や本町辺りでも瞬く間に浸水しました。この洪水は昭和4年(1929)に着工される渡川(現在の四万十川)改修工事の計画の規模を決める洪水となりました。この話は、母馬のいななきによって子馬が救われた親馬子馬の話です。

## アクセス

うしろ後川



- 土佐くろしお鉄道中村駅より北北西へ直線距離約2km
- 四万十市安並
- 緯度経度 北緯33度00分00秒, 東経132度56分07秒

